

入院で命長らえる

滋賀県 林 憲 二

聞き手 入ソ以来復員までお話し願います。

林 昭和二十年三月二十日、フラルギ教育隊五一五へ入隊、原隊ハイラルに戻った。興安嶺の陣地構築作業に従事、坑木の集積に行き作業を続行した。二十年七月初めに興安嶺へ復帰した。

八月八日ソ連参戦で、部隊が編成され、挺身大隊へ転属した。ブハトへ集結して、五十名単位の小隊となり、三個大隊編成され、陣地構築のために出発した。二十キロほど行軍していたが、方向を間違つて、森林鉄道へ向かつて直線的に進み、途中二泊しながら鉄道沿線に到着、八月十七日に終戦の連絡を受けた。

ブハト付近で武装解除を受け、ブハト収容所へ入った。入所後、糧秣等の貨車積込みの使役に出され、十月中旬、約千五百名の大隊に編成され、同駅より貨車

で満州里を越えて、二、三日でノバヤ駅に到着した。二、三時間の後、また編成替えが行われ、五百名が製材所へ廻され、残りの千名は徒歩で約五十キロくらい離れたチタ地区二十四分所に到着した。

建物は充分でなく、建物の建設と鉄条網をつくらされた。十一月に建築工事が終わると、伐採作業に出されるようになり、食事は夕食はコンブと塩タラのスープ、コーリヤンのカーシャ、朝食は魚または肉の入ったカーシャおよび三百グラムの黒パン、昼食はカーシャを各々支給された。

中には水を足して量をふやし、満腹感を味わっていた戦友もありました。夏はニラ、秋は茸をとって食い足しとしていた。伐採はノルマがあり体力も弱つてきたが、何とか踏ん張って達成するよう頑張つて働いた。作業中、木の下になつたりして死亡する人も出てくる状態で、何とも言いようのない思いをしながら、身の安全を計るよう作業を続けておりました。

二十二年春頃まで、同収容所で働いておりましたところ、発熱し休んでいたところそのまま意識がなくな

り、意識が回復して初めて入院していたことがわかり、そのまましばらく入院しておりました。

退院後、収容所内に保管されておりました死体の処置に従事しました。この死体は、冬期中に死亡された方を、約十五メートル四方の穴を掘り埋めてありましたが、浅く、充分埋めることができなかったため、夏になって深く掘り、二体ずつ埋葬しました。当収容所で亡くなった方は三百三十名ほどでした。衷心よりご冥福をお祈りしました次第です。

二十二年七月頃、五百名ほどがノバヤの駅近くの収容所へ移動させられ、作業は製材と貨車積み込みである。その後、川の上流からバラで流れてくる木材を下へ流す作業をしておりました。

食事は少しずつよくなってきたようであるが、入浴はなく、一か月に一回、シャワーと衣服の煮沸だけで、南京虫やシラミに悩まされたことはまだしも、発疹チフスと腸チフスの発生から、栄養失調と労働過激からの結核による死亡者等、多数の犠牲者を出している。誠に残念なことで、異国の丘に眠れるこれらの帰らざ

る各位のご冥福を心よりお祈りいたします。

その後、道路工事に従事、補修等をしており、鉄道線路の改修にも狩り出された。

二十三年七月頃、二百五十名程が移動することとなり、着いたところがナホトカであった。到着後、直ちに収容所へ入り、ナホトカ港の岸壁の建設工事に従事させられ、基礎づくりをやりました。到着時はお粗末な岸壁であったが、作業の甲斐あって、よいものになり上がり、ソ連マネージャーも大喜びであった。

その後アパートの三階建て工事に従事、これはレンガを積み重ねるもので、いろいろな工程があり、私はレンガを積む作業をしておりました。アパートが完成したので、いよいよダモイということとなり、八月末日、待ちに待った日本の船がナホトカ港へ入り、我々の乗船を待っておりまして。早々に乗船し、日本に向けて出港し、乗船してよかったと感無量であった。

一日も早く帰りたい希望がかなえられホッとした。九月二日舞鶴へ入港し、上陸し、帰還することができた。長い抑留生活にやっと終止符を打つことができた。